

うな雰囲気家庭のなかになくなったことにより、子どもも2～3ヶ月で穏やかさを取り戻している。父子グループのなかでも、子どもとのかかわりによって親子関係がより促進された経験が語られた。

さらに、Cさんのように、離婚して距離ができたことによって、子どもと別居親との親子関係がかえって好転したというケースもみられた。結婚生活をしていた頃には、父親は子どもと殆どかかわりをもたなかったため、子どもにとってはいい思い出はなかったと思われたが、離婚後は子どもを色々な所へ連れていくなど「今はいい父親」になっているという。このように、家族の再形成過程が親子関係の再形成にも繋がっているケースもみられた。

なお、離別を通した子ども自身の変化については、年齢に応じた子どもへの対応が必要とされる。Aさんの場合、中学生の男の子が転校をしなければならない経験をもつが、学校の先生にも恵まれ、かえって転校によって子どもの状況が好転している。親ばかりでなく、保育所や学校など子どもに身近な機関のかかわりが重要である。

■友だちに羨ましがられる親子の会話

【母子グループ③】

司会者： Gさんの場合は、離婚についてご長男が反対したということありましたが、別れた後のご長男の変化はいかがですか。

G： うち、やはり離婚する前も生活、仕事の時間帯が全然逆だったので、子どもが学校に行くときは主人は寝ていて、学校から帰ってくるともういないんですね。ですから子どもが寝てから帰ってくるので、まるっきりすれ違いの時間だったんですけれども。だから、ほとんど土日って自分ひとりで出かけちゃいますし、うちも母子家庭みたいなもので。ずっと子どもとたまに一緒に食事に行くぐらいで。そういう意味で、お父さんは自分が起きているときにいなくても、やっぱり家族なんだということ主張していたんですね。家族は家族って。

司会者： 何か、形をつくりたかったという感じでしょうか。

G： ですが、離婚してからもそういう状態っていうのは、ほとんど母子家庭だったのと変わらないんですけれども。そうですね、私があんまりいい表情じゃなかったのかなって思うときがいっぱいあったわけです、結婚していた当時というのは。それがなくなって、何でもかんでも、何をするにしても、一応子どもたちに相談するんですね。何かやるときとか、どこか行くときにしても、こうするよとか、こうしようとか。そういう機会が多くなったし、一緒にいる頃からもそうでしたけれども、ものすごく、皆さんと同じようにいろんな話をしてくれるんですよ。

司会者： 一時期反対していたけど、そんなことは通り過ぎたようですね。

G： 逆に、何ていうんですか、母子家庭になってから、私にすごく優しくなったっていうか、気を使ってくれるっていうか。具合が悪いときは、「お母さん、大丈夫？」とか、タオルを絞って持ってきてくれたりとか。そういう優しさっていうものが、一緒にいる頃よりは、家族・親子3人しかいないんだからっていう、だれかが困ったときはだれかが助けなきゃねという部分を常に口にするようにしてきているので。ですから、じゃあ、こうしようとかいうのが自分にも出てきたみたいで。一時はちょっとふさぎ込んでいた時期もあったんですけどね。でも、それ以降はもうほんの短い間でしたから、ほんとに何でもよく話します。娘のほうが最近ちょっと、何考えてるのっていうのがわからないぐらい。上の子は、ほんとおしゃべりだねっていうぐらい、ちょっと黙っていられないっていうぐらいしゃべります。ですから、あまり何をやっているかわかんないっていうのは、うちはないですね。ですから、逆に結婚していた当時よりはにぎやかですよ、家の中が。

I： それはありますよね。

G： だからお兄ちゃんの友だちが遊びに来て、「Gのうち、いいよね」って言うんで、「何で？」って言うと、「いや、うち、親とこんなに話ししないわ」って言うんです。

I： 一緒です、一緒です。

司会者： それは、子どもとしては自慢ですね。

I： 「いいなあ、いいなあ」って言ってますね、みんな。

G： 「うちでご飯食べていけば」って言うと、「ええ、いいんですか？」って言うから、「いいよ、いいよ、どうせ一緒だから」って言うと、「ええ、いいな」って。食べているときも黙ってないんで、「いいよね、よく話しするよね」って言われるんですね。そういう意味では、今のほうが子どもも私も…。ですから離婚した当初は無理であった部分も、今はすごくいい形になっているかなというのはありますね、親も子も。

■言えなかった関係から言える関係へ

【母子グループ⑤】

司会者： Oさん。何か母子家庭になって自分自身が変わったという点がありますか。

O： 私も同じかなあ。私もやっぱり父親の姿が男の人の姿だと思ってずっと育ててきたから。それが主人と違うから、言いたいことも言わないというか、明治の男ですから一家の大黒柱という。なので、何でこの人だらしないんだろう、頼りないんだろうって、自分がいつも不満に思ってたんですよ。だからそこも私が成長しきれない部分で、相手をちゃんと一人の男として見てあげなかった自分がやっぱり子どもだったのかもしれないんですけど。今は逆にすべては自分の責任で子どもは育つと思ったら、自分がしっかりしなくっちゃって思えば思うほど空回りするから、すべてのことを子どもたちと3人でよく話を。「お母さんはこうしたいんだけどどう？マンションを買いきたいんだけどどうする？頑張ってみる？じゃあ頑張ろうか」とか「食事が一品少なくなるよ」という感じで、すべてを自分の意見を言えるようになってきて、それを子どもにぶつけて、子どもたちと一つ一つ解決しようかなという部分があったんですけど。やっぱり主人がいると、だんなさんをまず立てなくっちゃいけないと思ったから、すごくストレスが多かった。

司会者： 自分の意見を言えなかったですか。

O： 言えなくて。だから自分がだんなさんにすべて 100%やってあげられないから、引け目だから、何か言われても言い返せなかった。

司会者： お子さんが入院されていたのですからね。でも、言い返せなかったってつらいですね。

O： ですよ。言えなかった。やっぱりそこがいつも引け目だったから。「帰ってきてくれよ」と言われても帰れないという部分で引け目だったのが、今は何でも責任はあるけど、もうひとりで抱えない。

司会者： だから親としてのあり方が変わったんですね。前だったら、親としてもっと自分で頑張らなきゃと思っていたのが、一緒に話し合いながら。

O： そう、だから今日は疲れたなと思ったら、「今日ご飯がつかれないから外へ行って食べよう、お母さん今日疲れた」って素直に言えるようになった。結婚時は言えなかった。だって物が飛んできたり。

おかずが一品足りないとか、お総菜を買ってきて、ちょっとお醤油とお砂糖でこう変えて出すんだけど、でき合いつてわかるんですよ、男の人は。バーンとテーブルをひっくり返しますから。結局いつも子どもに私がとられていると思うと、100%自分の面倒を見てほしいから。病院から1～2時間もらって、ちょこちょこ帰っておかずをつくっておいたりするんだけど、でき合いのものを買ってきて形を変えて置くんだけど、わかっちゃいますね、味が。そういうことですよ引け目だったけど、今は「ごめん、ご飯できない」と言うんです。「お弁当買ってこようか。悪いね。」とか言ってすごく自分を出せる。

司会者： それってすごく心の健康に大事なことですね。

O： だから、お母さんもつらい日があるということ子どもがわかって、子どもがイヤな日もあるってということをお互いにわかりあえるような。

■自分自身の変化

【父子グループ②】

S: みんな「大変だったでしょう」と言うんですけど、別に大変だと思わなかったんですけどね。いろいろ勉強になることもあったし。やっぱ自分が連れていくと教えられることもいっぱいあるから、いやあ連れてって本当によかったなと。だから、あのまま向こう（元妻）が連れていっていたら、とび職なんでイケイケでやっているから、やっぱ収入も取っちゃってるし、あと仕事も一人前にやっていると、テングじゃないですけど、「もう何でもやってやらあ」みたいな感じのところもあるから、あのままいっていたらヤバかったんじゃないかなって。今考えてみたら。だから、そういう意味ではよかったんじゃないかなと。

司会者: じゃ、父親になったことでというか、子育てすることで自分も変わられたということですか。

S: そうです。すごい丸くなったと思いますよ。

■安心のある暮らしのなかでの子どもの変化

【母子グループ①】

司会者: でもやっぱり（子どもの）お父さんは、子どもが産まれても変わらなかったわけですか、3年後でも。

B: そうですね。やっぱり、こう、暴力というか、口げんかから手が出ちゃったり、やっぱりカーッとなる性格っていうのは変わらなかったですね、子どもが生まれても。

（中略）

司会者: お子さんに何か変化はありましたか。

B: 子どもの父親といったころは、ケンカとかして、やっぱりそういうので（子どもが）ビックリしちゃうとか、家の中がいつも穏やかな雰囲気じゃないじゃないですか。だから子どももよく泣いていたんですけど。

司会者: それが子どもにもわかるんですね。

B: だから言葉はしゃべれなくても、そういう雰囲気わかるんだと思う。

司会者: それが、おじいちゃん、おばあちゃんのところ暮らしようになってお母さんも安心な感じで、穏やかな雰囲気でも子どもも明るくなったという感じですか？

B: 穏やかにのんびりっていうか。そんなに父親みたいなイライラしたような性格は引きずっていないというか。

司会者: 家を出られてどのぐらいの時期から「お子さんが変わったな」というふうに思われましたか。

B: もう2~3カ月で、なんか、変わったなって。私が変わると、やっぱり。

司会者: お母さんが緊張しているか安心しているかによって、お子さんも。

B: ずいぶん違いますよね。

■距離があることで形成された父子関係

【母子グループ①】

C: ただ、子どもの意思を尊重してあげたくて、今はうちに居るより向こう（子の父親宅）に行っているほうが楽しくて、帰ってくるのが嫌だとか言い始めているらしいんですよ。一緒に暮らしていた時は本当に旅行とかも何にもしなかったのに、別れてから「あっち行った。こっち行った」って、なんでそれが今までできなかったのかなって思いますけども。

司会者: お子さんにとっては、いい形ということになりますか。

C: そうです。だからかえって別れてよかったんだろうなって、子どもにとっても。

司会者: なるほど。距離があるほうが親子関係が逆に言えば形成されているっていうことですね。

C: 子どもにとっては別れる前は父親に対して多分いい思い出とかは、彼らは多分なかったと思う

んですよ。

司会者： それほどにかかわりがなかったのですね。何もかかわらなかったのに、別れてから父親がかかわり出したということになりますか。

C： そうです。なので、子どもにとっては今はいい父親であるらしいし、子どもの気持ち的には前より幸せなのかなと思っていますけどね。

■中学生の子どもの学校生活の安定

【母子グループ①】

司会者： 最近はどうですか、息子さんは。

A： うーん、そうですね、父親のことは全然言いませんね。たまに思い出して、みんなで話になるときもあるんだけど、別に全然屈託はないですね。難しい年ごろなので、学校とかに溶け込めるか、いじめとかいろいろ田舎とまた違いますから、それはすごい心配してたんですけど、たまたまいいクラスだったんです。だから本当に以前イライラとかして「学校とかは行きたくない」とかと言ったときもあったんだけど、そういうのも全くなって。

司会者： じゃあ、学校は楽しかった？

A： 楽しかったんです、こっちに来てから。

司会者： イライラしていた時期は、まだ別れる前ですか。

A： 向こうにいたときです。「あんた、あのままだら本当に高校なんか行けなかったかもしれないよ」なんて今は言っちゃうぐらい。今はこっちの中学校は楽しくて。

司会者： じゃあ、むしろお子さんはいいように変わられたってということですか。

A： そうですね。担任の先生もすごくいい先生で、自分が好きなタイプの先生だったみたいなんです、男の先生。

3. 社会関係の変化

離別による生活の変化は、社会関係においても変化をもたらしている。まず、離婚母子世帯の場合、結婚生活のなかではクラス会に出席したり友人に会ったりすることが制限されていた、あるいは全くできなかった出席者が多く、Cさんの言葉に象徴されるように「結婚してから大分友だちをなくしたんです」という状況を経験している。しかし、離婚によって、その人間関係の回復が図られている。

一方、父子世帯の場合には、子どもや家庭のために時間を割くようになることによって、かえってこれまで形成されていた友人関係や職場での人間関係が狭まっていくという体験が語られた。その背景には、時間的につきあいができないということに加え、仕事と子育ての両立からくる疲れもみられる。しかしながら、父子家庭になったことによって、これまで形成されてこなかった関係が形成されてきたという経験が、多くの出席者から聞かれた。そのひとつは地域の人間関係である。たとえば、Qさんは、地域に対して自分をあけっぴろげにして、頼むことができる関係を作ってきたことによって、「すごく地域の人と話すのが好きだし」と語っている。Qさんの場合、退職したある校長先生の講演を聞いた際、「子どもは社会の子ども」という視点を得たことが「目から鱗」という経験となり、子育てで犠牲になるのではなく自分で楽しもうと気持ちを転換できたことが大きかったという。「男がこんなことやったら沽券にかかわるじゃないかみたいなどころって、何かどっかあるんですよ。それをまず取っ払っちゃうことが一番大切なんだろうな。もうばかをやっちゃおうと。そしたら受け入れられたっていうか、もともと受け入れてくれたんでしょけど、自分がそう思っただけなんですよけどね」というQさんの言葉には、「男らしさ」という社会の規範から自由になることによって、新しい関係形成が図られていることが読み取れる。

父子世帯になることによって形成が促進されたもうひとつの関係は子どもとの関係であ

る。たとえば、Vさんは父子世帯になったことによる自分の変化を次のように語っている。「そうですね、責任感。もともとありますけど、子どもに対しての責任感。親ですから。子どもを育てる義務あり、権利あり。」日本社会における男性労働の態様は、男性が子育てをする権利を保障する視点を欠落させているため、男性は育児の主体ではなく「育児に参加」するという位置しか付与されていない。Vさんの「権利あり」という指摘は、このような社会の有り様への端的な指摘であるといえるだろう。このようにして、とかく女性が多い生活領域のなかで、学校の授業参観に参加する経験、おやじの会を組織したり参加する経験、スーパーに買い物に行く経験などが語られたが、それらを通し、「人生が変わった」「子どもをみる視線がかわった」と表現する出席者もみられた。

しかし、一方で、「父子家庭であること」と「企業社会の男性であること」「社会のなかで男性であること」の間に壁があることにも目を向ける必要がある。たとえばUさんは「会社で家庭的なところ見せられないですよ」と語り、母子世帯に向けられる社会のまなざしとは異なる父子世帯へのまなざしについて指摘している。あるいは、「父子家庭だからって目でみられているかな、と思ったりするとがんばっちゃうんだよね」「マスコミだけじゃなくて世間的にありますよね。片親だからってというような面ってあるじゃないですか。そういう意味では見られたことはないですけど、そういうふうに見られそうだなあっているのがあるから頑張っちゃうわけですね、少なくともそう見られないように」といった言葉にみられるように、男性が子育てをしている家庭への社会のまなざしを意識すると「頑張ってしまう」という位置に置かれる現実についても指摘された。当事者がひとり親世帯を形成するプロセスで獲得している暮らしへの意識からは、社会のジェンダー規範・家族規範を問う重要な視点が提起されているといえるだろう。

母子世帯の場合

■人間関係の回復

【母子グループ①】

司会者： 結婚していたときは、友だちと会うのも束縛されるというか、友だち関係を作りたくても作れなかったということがあるのでしょうか。

C： そうですね。だから私は結婚してからだいぶ友だちをなくしたんです。もう「つき合いが悪い」って言われて、本当にみんなだんだん……。最初のうちは誘ってくれるんですけど、10回誘って10回行かないともう相手にしてくれないじゃないですか。「あいつは誘ってもダメだ」になっちゃうんで、大分それで友だちをなくしましたね。

司会者： それをもう今取り戻しているという感じですか。

C： そうですね。この間も暮れか何かに高校のときの友だちがやっぱり誘ってくれて、毎年誘ってくれてずっと結婚してから一度も誘ってくれたことに対して行けなかったんですけど、離婚してから初めて行ってきました。だからもう15年とか16年ぶりに会って。

質問： やっと会っちゃったんですね。

C： 「本当に久しぶりだね」って言って会って、高校のときの気持ちに戻って行ってきましたね。

司会者： Aさんはいかがですか。

A： 私はやっぱり結婚してから本当にクラス会とかも出たことがない。高校も中学も出たことがない。

司会者： 出たら怒られたんですか。

A： 「出なくていいよね」って最初に言われちゃうから、もう申し込み自体もできない。だから今さら出たい気もなくなっちゃうてる。だからそういう人たちとのつき合いはまるっきりないです。

****父子世帯の場合****

■友達がつくれなくなった

【父子グループ②】

- T: でも友だちがつくれなくなったというのがありますね、やっぱね。
司会者: 自分が、それとも子どもたちが、つけれないってことですか。
T: やっぱり任せっ切りにはできない。今まで一緒にいるときは任せっ切りになっていたじゃないですか。今はそうじゃないじゃないですか。全部考えなきゃいけないから。
W: そうそうそう。だから一見考えてないようだけど、考えてるってことですよ。
司会者: その考えているってことは、ほかのことに考える時間がないので、という意味ですか。
T: だから本来ならば友だちと、もう 10 のうち 7 ぐらい割きたいところが 4 とか 3 とかなると、やっぱりそうしていると疎遠になるじゃないですか。
W: 多少そういうのは出てきますね。
司会者: そういう遊びの部分はやってられないんでしょうね。
W: それは遊びとかじゃなくて、いろんな面でそういうふうになると私も思いますよ。
司会者: お仕事のことと、あと家庭のことでもう頭がいっぱいで、自分のリクリエーションとか楽しみってことがなくなったということですかね。
T: ほとんどないような感じだね。土日といっても完全に疲れちゃってますもんね、日曜日なんか。

■飲んで帰ることが少なくなった

【父子グループ②】

- 司会者: 離婚されて何が変わったかというか、子どもを育てることで何か変わったか。自分の中で何が変わったかというのがもしあったら聞かせていただきたいんですけど。
T: 女性を見る目が厳しくなったよね。
司会者: 女性を見る目が厳しくなった?
T: まあ、だれでもかれでもというわけにはいなくなっちゃった。
W: 私は夜、飲んで帰るのは少なくなった。まあ飲んで帰っても、早く帰るようになった。子どもをね、やっぱり食事の問題とか。ちゃんと「今日はおそくなるぞ」と、「冷蔵庫に何々があるからこれ食べてれば大丈夫だぞ」と。あと、「野菜不足にならないようにこうだぞ」ということはやりますが、でもやっぱり心配ですよね。だって携帯電話が普及したっていうのはこの 2~3 年なんだから。それまで電話しても出ねえから、あれ行方不明かな、どうなってんだろうと思ったら寝込んでたとかね。病気じゃなくて、もう疲れて寝てるとか、聞こえないとか、そういうのがありましたよね。今はもう携帯電話を持ってますから、カチャカチャやっていますよ。その分お金の量が大変で、ケータイとパソコンで 7000 円ぐらいずつふえて、小遣いとは別に払ってるでしょ、だから 1 万 4000~5000 円。パソコン 26 万で買って。
司会者: W さんは夜飲みいかなかったということですね。
W: いや、飲んでいても早くね。前はもう 12 時 1 時、もうタクシー、チェッカー車を呼んで、そんなような生活でしたから。というのは私の場合、先ほど言いましたけど、雇われている者の反面、自分でアパートというか、父が残してくれたようなものがあるものですから、収入があるからその分。だからまあ、それこそ旅行行ったりなんかあれだったんですけど。でも、子どもが小学校 5~6 年から、そういうものがだめだと。それで 2 歳からずっといたというけど、もうたった 1 人ですから。2 人きりの人生をやってきてる。女の人とかそういうのじゃなくて私の男の友だちが来て、うちで飲み食いたり、そういうこともありましたけど。だけどその前までは、母親たる人間がいるときは結構いいかげんに、夜おそくまで。

■地域の人と話すのが好き

【父子グループ①】

司会者： 父子家庭を営んでから、自分が変わってきたところ、というあたりについてもう少しお聞きしたいと思うのですが、いかがでしょうか。

Q： 少なくとも地域に対して、すごく自分、もうさらさないと面倒を見てもらえないですからね、もうあけっぴろげになって、ここまでできるよ、ここまでしかできないよ、もうあと頼むね、みたいな感じで、何かそういうふうになりましたからね。だからすごく地域の人と話すのが好きだし。

■人生が変わった

【父子グループ①】

司会者： Qさんはいかがですか。お子さんが5人いらっしゃると学校行事の参加も大変ですね。

Q： もう無理だと思ったんですよ、それ。いろんな、ほんと、多すぎるし。だからもう、子どもは国の宝というぐらいなんだから、もう地域の人に育ててもらおうと。

司会者： 子育て観を変えた、という感じですか。

Q： ええ。そのかわり自分ができることだけやろうと思って、まず高校のPTAで、今会長をやっているんですけど。やり始めたら、あっ、こんなこともできるんだとか、結構時間は作ればできるんだな。で今、中学校と小学校で「おやじの会」っていうのを作っているんですよ。

司会者： おもしろいですね。中学校と小学校で作られたんですか。

Q： ええ、そうです。結局お父さんたちが出てこないから、知ってる人もいないから出にくくなっちゃうんですよ。知ってる人ができてくれば、行けば誰かに会える。学校の行事に出やすくなるんですよ。

司会者： 出ていっても女の人がいっぱいとか。

Q： そうなんです。いる場所がないわけですね。そういうのを少しでもなくしていこうと思ってね。結構、会員は集まりましたよ。

司会者： すごいですね。おやじの会を作ってどの位たちますか。

Q： おやじの会はね、小学校で2年目で、中学校で1年目ですね。中学校の校長先生から、中学でも作ってくれと言われたので。それやっているとね、子どものためと思ってやってたんですけど、だんだん自分のためになるんですよ。

司会者： それが「自分のため」というのはどういう感触でしょうか。

Q： まあ学校へ行けば自分の居場所がある。先生もみんな知ってる。子どものこともよくわかる。で、子どもとの共通の会話ができる。

司会者： おやじの会はQさんの発案で始められたのですか。

Q： そうです。一緒にやり出したやつもいるんですけどね。お父さん達はね、何でもいから子どものために本当はやりたいんですよ。だけどやる場所とあれがないんですよ。ただ最初のきっかけが。

司会者： そうすると、そういうことはある意味ではQさんのライフワークの一つみたいな感じですか。

Q： ライフワークまではいかないと思いますが、子どもがお世話になってる間はですね。やっぱりそういうことが、子どものために自分が犠牲になってるなんていうことを子どもに思われてもいけないし、自分でも思ってもいけないし、子どものおかげで自分が生き生きと何か楽しめる場を得てるような感じでやっていったらいいなあと思うんですけどね。それが子どものために逆にいいのかなあと思うんですけどね。

司会者： そういうふうな考え方に発想を転換させていったというのはいつ頃からなんですか。

Q： ええとね、そうですね、いろんな大学の先生の講演会みたいな結構あるんですよ。そういうのを聞いてるうちに、子育てっていうのはどういうことなのかとか、その講演の一つでそういうのを聞いたときに、何か目からうろこが落ちたような感じがしてね。そう、自分で楽しめばいいんだ。

司会者： それは目からうろこという感じだったんですか。それは大きな体験でしたね。

Q： ええ。これからもだから何か子どものことでやってるうちに、またいろいろ何かあるんだろうなと思うんですよね。

司会者： そうすると、その前というのは、楽しむっていうことだけじゃなくて、犠牲になってるなっていう感じのこともありましたか。

Q： ええ。まずは嫌でしょうがなかったですね、行っても。授業参観でも楽しくないじゃないですか。

司会者： 周りに男の人は少ないですし。

Q： そうですよね。苦痛でしたね。でまあ、ひとり親っていうのを楯にして。で、ああそれじゃしょうがないですね、みたいな形で思われていたみたいですね。やはり私がそうなんでしょうけど、男がこんなことやったら活券にかかわるじゃないかみたいなどころって、何かどっかあるんですよね。それをまず取っ払っちゃうことが一番大切なんだろうなと。もうばかをやっちゃおうと。そしたら受け入れられたっていうか、もともと受け入れてくれたんでしょうけど、自分がそう思っただけなんでしょうけどね。

司会者： そういうふうにやってみると、また見えるものが変わってきましたか。感じることなどが。

Q： そうですね。子どもとも近くなったし、昔はもう、高校生なんか茶髪とかいっぱいいるんですよ、ピアスしてたり。もう茶髪イコール不良だと思ってたんですけどね。その中へ入っていくと、別に普通の子でね、ただファッションなんだという感覚でとらえられるようになってくるんですね。何か逆にそういう子を見て、変な目でこっちが見ちゃってたんだな、と思いますね。

司会者： そういう意味では学校の行事も積極的に参加されてるようですけども、以前とはかなり違いますか。

Q： まるっきり。役員も何もやったことないです。まあ一番大きいのは、自分の人生が変わったということです。

司会者： もう子育てだけでなく、人生そのものが。

Q： ええ。嫌だ、嫌だと思ってる、ほんと、嫌なんですよね。それに付随する学校のことも全部嫌だし。

司会者： その「人生が変わった」というのは、どんな変わり方ですか。

Q： まず新聞見ても、やはりそういう学校のことの記事みたいなのがあると、やっぱり興味がありますしね。まあすべてですね、何か。ただ新聞は最初あれですよ、チラシから見ますよね、スーパーの。やっぱりあれ、大切なことですからね。

■子どもを育てる義務も権利もある

【父子グループ②】

司会者： Vさんはどうですか。ひとり親になって、自分がどう変わられたと思われませんか。

V： そうですね、責任感。もともとありますけど、子どもに対する責任感。親ですから。子どもを育てる義務あり、権利あり。大体、A 中学校というところは結構いいですよ。保護者会があるじゃないですか。いつも行くんですけど、みんな女性なんですけど、それが恥ずかしくてしょうがないです。

W： 私は1回も行かない。ただ、先生の面接にだけは行く。担任の先生だけ。だけど、授業参観は一切行かない。子どもも「来ないでくれ」と言う。

T： 同じ状態ですよ。

W： だんだんね。

V： 年も違うでしょ。でも、逆に同情買いますよ。Vさん大変ですねって。校長とも飲み仲間ですから。あと、おやじの会とか。

W： ああ今、おやじの会なんてあるんですよ。

V: それ、いつも参加してます。それでいろいろなバランスとって。
W: あと防犯上の見回りとかもやりますよね。
V: そうです、やっています。
W: 運動会の後片づけ大会とか、重いもの持つとかさ。だから、いいように男の親を使おうとしてるんですよね。でも、レクリエーションもあるんですよ。バレーボールとかソフトボールやるとかね。

■明るい父子家庭

【父子グループ①】

司会者: 例えば飲み会に行きますよね。そういうときにご自身が父子家庭であるということもお話をしたりはするんですか。

Q: ええ、うちはもう、さっきの「目からうるこ」の話以降は、明るい父子家庭というのをキャッチフレーズにして、別に隠してるわけでもないですけどね、何かそういうことを偶然でも何か相手が知ったときに、そこに気を使ってもらうのが嫌なんですよ、非常にね。だから最初にね、もう言っとけば、オープンでつき合えるんでね。で、もうそういうキャッチフレーズでやっているんです

■父子家庭への社会のまなざし

【父子グループ②】

U: ただ、やっぱり母子家庭と父子家庭だったら、やっぱり母子家庭のほうが社会的に弱いんだという社会的に、何というんですか認識というかコンセンサスができちゃってるから、父子家庭はさっき言われたように数字に出てこないし、わかんないし。だからそういうテレビで言ってくる人の気持ちというのは、僕も見ても恐らく言うでしょうね、きっとね。「同じじゃないの。むしろ男のほうが大変よ」みたいな。と思いますけどね。

司会者: そうね。男の人は子育てを前面に出せないというところが厳しいですよ。

U: うん、そうですね。だって、会社でそんな家庭的なところ見せられないですよ。

T 出さないことが基本ですから。

U: 出さないことが原則ですよ。今の企業は。

W: 個人事業ならいいですけどね。私の場合は半分そんなような感じもあったからよかったんですけど。でも今Uさんがおっしゃったように、先生の態度によってだいぶ違う。

4. 暮らしの「安定」

グループ・インタビューでは、ひとり親世帯になって以降、どのような時期に「これでやっていける」という実感をもったか、という点を意識的に尋ねてみた。結果として、ひとり親世帯になるまでの経過、子どもの年齢、生活基盤の状況などによって、多様なものであることが把握された。たとえばFさんの場合、子どもと死んでしまおうかと思いつめる経験をしており、そこから一歩踏み出すためには心理的な支えや時間が必要であったことを語っている。また、Iさんの場合も、経済的に行き詰っていた頃に死のうかと思ったことがあるという経験をしている。しかし、安定した仕事が見つかるには長い時間が必要とされ、二重労働を長期に渡り続けた末、現在ではひとつの仕事でやっていけるという実感を持てるようになってきている。Iさんの場合には、「ひとつの仕事でやっていける」という生活基盤の確保が大きかったといえよう。

さらに、Oさんの場合には、公務員になれ、その後公営住宅が当選したときに「ふっと一息つけた」という。「ここから基盤ができ出発できるなって思いましたね」という。そして、その後、子どもが高校に入った頃、何か自分でおかしいと思い精神科に行ったところ更年期障害による「うつ」と診断されたという。「義務教育が終わった段階で一人前かなと思ったとき、うつですね」と語ったOさんの言葉からは、子どもを育てあげるまでは一息をつけないほど走り続けてきた暮らしであることが推察される。この点について、

Mさんは共感を示しながら、こう語った。「結局、何か一人親ってというのは、子どもをいわゆる社会に通用させるということに力を注いだというような気がするんですね。引け目をとらせたくないという思いがあるから。だからそれがなくなったときがちょっと危ないかな」。それを聞いたOさんは、さらに「母子家庭だから、親が働いて家にいないから、とか言われることはやっぱり何回かありましたね。だから余計、本当に何回も言うようだけど、かわいい女になれなくて、肩肘はって、負けたくない。」と思うということ、言葉にした。このように、ひとり親世帯をとりまく社会のまなざしから子どもを守るがために、子どもを育てあげるまで走り続けるという親の営みが持続されているともいえよう。

ひとり親世帯の自立支援が社会的取組みとして推進されているが、その基盤には社会そのものが家族をめぐる意識や価値を成熟させていくことが必要とされているといえるだろう。

■踏み出すための支えと時間

【母子グループ②】

F: だからもう子どもと死んでしまおうかと思ったときも、もちろんあったけど、友だちが「だめだよ」って。「女の人なんだから、そのスーパーへ行くにもお化粧をして出るようにしな」ってアドバイスをもらって、徐々にそれをしていったんです。そうしたら、今の生き方になっていって。今は本当に充実しています。

司会者: そんなふうにもうこれでやれると思うまでには、どのくらいの時間がかかりましたか。

F: 1年はかかったでしょうか。あれはだれのせいでもなくて、自分のせいなんです。自分が動かないだけで。そのときって、自分が悲劇のヒロインになっちゃっているから、そのときって。自分は不幸だなとか、自分がかわいそう、子どもがかわいそうって。自分が一步踏み出すと、なぜそんなことを考えていたんだろうって。

司会者: でも、踏み出すためには大事な期間だったんですね。

F: そうですね。逆に、今、そうやって言ってくれた友だちがそうなっちゃったんで（離婚したので）、「昔、私に言ってくれたじゃん」といって踏み出たので、よかったなと思います。

■ひとつの仕事で経済的にやっていけると思うまで

【母子グループ③】

司会者: やはり不安というのも大きかったですか。自分の経済的な稼ぎでやっていけるかどうかという点では。

I: ほんとに死のうかなと思った時期もありましたね。食べていくお金がないというのもありましたので。多分、どん底に落ちていたときは、相当暗かったんじゃないでしょうかね。要するに、金銭的な心配というのは、顔にも態度にも全部出ますよね。ですから、今思えば相当暗かったんじゃないかなと。ただとにかく働かなきゃ、働かなきゃという。生活していかなきゃいけないんだというのがありましたので。

司会者: 二つの仕事をこなされながら、どのくらいの時間がたって自分でやっていける、と思われ始めましたか。

I: そうですね。やっぱり一つの仕事になってからですね。今この仕事が、もうすぐ6年に入りますね。

それまでは、この仕事をたまたまスタートした方が独立してやっているという状態だったので、全然先が見えなかったんですね。ですから、収入を絶対くれるという保障がなかったんで、ちょっと私は不安でした。

■公営住宅に当選し、ふっと一息つけた

【母子グループ⑤】

司会者： 母子で生活をやっている、というふうに最初から思っていましたか、それとも何年かたってからでしょうか。どのぐらいの時期にこれで大丈夫だというふうに感じられるようになりましたか。

O： あの子が1歳半になったときにこの仕事（公務員現業職）に合格して、3年たって都営住宅に入ったときに、やっぱりふとため息が出た。

司会者： ため息が出たという感じですね。

O： フツとこう一息つけた。ここから基盤が発射できるなって思いましたね。やっぱりアパートにいれば2年で更新があって、いろんなことで出て行けと言われてたりしたら困るなとかという問題があったけど、公営住宅に入ったらそれはない。いろんな面で、公務員試験も受かったしというところで、フツと。

司会者： それまではフツとはしなかった感じですか。

O： そうですね、必死でしたね。ただ息子が高校に入ったとき、正直言って今なんですけど更年期障害と言われて、いま更年期障害によるうつっていうやつなんですよ。

司会者： 仕事のこととかお子さんのこととか、節目節目に体の変化などを感じているということですね。

O： ですね。高校に入学したときに、やっと一人前だなって。義務教育が終わった段階で一人前かなと思ったときに、うつですね。

M： 疲れがどっと出てくる。

司会者： その感じがわかりますか？

M： 何となくわかる。うちは今、下は高2なんですけど、部活で結構まだ手がかかるので。だからこれが終わったら、私は何かガクってくるなって今から予感します。何かぼうっとしちゃうだろうなって。

司会者： 一番大変な時期を少しいま超えた、という感じですかね。だからやっぱり育て上げれば育て上げるで、またそこできますね。

M： そうです。結局、何か一人親っていうのは、子どもをいわゆる社会に通用させるということに力を注いだというような気がするんですよね。引け目をとらせたくないという思いがあるから。

司会者： そうですか、結構ありますか。

M： だからそれがなくなったときがちょっと危ないかなという。

司会者： そういうことを、お子さんから何か感じるということはあるですか。

M： 結局、自分の責任でそういう状態にしてしまったので、そこは自分で負い目になっているんですよ。だから自分のわがままからだから、そういうのを、それをハンディにさせたくないという思いはありますね。

司会者： そうすると何か肩肘を張っているという感じがしますか、ご自身にも荷物が乗っかっているというか。

M： 最初の頃よりはなくなったとは思いますが、でもやっぱりどこかには常にあると思う。だからまずは上の子は都立に行ったからいいんですけど。下の子が私立のときにもしそういう、よく片親でかかって言われると何か面接のときにあるというのは、そういうイメージがあったから、それが原因でだめだったらどうしようとか、そういうのはちょっとよぎりましたよね。

O： 母子家庭だから、親が働いて家にいないから、とか言われることはやっぱり何回かありましたね。だから余計、本当に何回も言うようだけど、かわいい女になれなくて、肩肘はって、負けたくない。

■ 1年間は地に足がつかない

【母子グループ①】

司会者： ここでやっていける、と思えるようになるまでに、年月としてはどのぐらいかかりましたか。

A： やっぱり1年間は足が地に着かない。2年たったときにやっと「ああ、ここで生きているんだな」って。

司会者： じゃあ本当によく最近そういうふうと思えるようになったのですね。

A： はい。

司会者： Bさんはいつぐらいですか。

B： 私は、離婚したときは実家に帰ってまだ父も若かったし元気だったので、そんな心配はなかったんですけど、やっぱり去年父が亡くなってから「ああ、私はこのままじゃいけないな」と思って、しっかりしなきゃ、というか自立しなきゃっていうのが。ちょっと遅咲きなんですけど。

司会者： 1年2年とかで解決するようなものではないわけですね、そういうふうに。

■ 子どもが学校に入るまでの不安

【父子グループ①】

司会者： そうするとお二人とも割と突然生活が変わったというような形ですよ。どうですか、どのくらいで、でもこれでもやっていけるなって思えるようになりましたか。

R： うーん。

司会者： 最初2～3年はね、来ていただける方がいたということですが、それからは？

R： やっていけないと僕は思ったことはないんですけども、不安はありましたよね。不安はありました。初め、小学校へ上がるまでですね。もう学校へほんと、行き始めたら、3人とも学校へ行き出したら、そういう不安は。

司会者： そうですね。3人学校に行ったら、ちょっと違いますね、気持ち的にはですね。

R： やっぱり学校へ入るまでですね。

司会者： そうですね。

R： (ひとり親になったのは) 下の子が1歳のときだったから。

VI 死別について

今回のインタビューに協力していただいた方々は「離婚」経験者が多く、「死別」を経験された方は3人(母子1人、父子2人)であった。最後に、配偶者と死別してひとり親家族になった方々のインタビューをとりあげる。

調査時点において、Pさん(女性、50代半ば)は、30歳から18歳まで4人の子どもと暮らしている。夫と死別したのは、長子が中学1年生、末子は1歳であった。夫の死因は心不全である。死別母子グループとして複数の方に集まっていたことができなかったため、単独でのインタビューとなった。

Xさん(男性、50代前半)は、20歳と18歳の2人の子どもがおり、妻と死別した当時、子どもは小学6年生と3年生だった。Yさん(男性、40代半ば)は、16歳と14歳の2人の子どもと暮らしており、妻と死別した当時、子どもは中学1年生と小学4年生だった。Xさん、Yさんともに、妻の死因はガンである。

1. 配偶者との死別

子どもを育てている間に配偶者との死別を経験することは多くの人に生じる経験ではな

いため、母子グループでは複数の当事者に集まっていたことができなかつた。父子グループも同様、Xさん、Yさんともに、これまで同じような立場の男性には会ったことがなく、今回のインタビューが共通の話題ができるはじめての体験であつた。

配偶者との死別については、それぞれ次のように語っている。夫を心不全で亡くしたPさんにとって、夫との死別は「突然のこと」であつたが、4人の子どもを抱えて「悲しむ余裕はなかつた」という。Xさん、Yさんは、妻がガンで死亡する前に約2年間の闘病生活があり、その看病を続けるなかで、妻との別れを受け入れていったと話す。しかしそれは、「あきらめきれないことをあきらめる」という受諾であつた。また妻との別れを覚悟するなかで、その後の父子の暮らしを考え、妻から料理を教わるなど、その後の生活面での準備を少しでも整えようとされていた。

■同じような立場の人がいない

【父子グループ③】

司会者： 周りに同じようなお立場のお知り合いとかおられますか。連れ合いを亡くされたとか。

X： いないですね。

Y： いや、いないですね。

司会者： こういう共通の話題が出るような。

Y： 初めてですよ。

X： そうですね。

司会者： わりと環境も似てらっしゃいますね。2年間ぐらい闘病されたり、ガンであつたり。お子さんの年齢もね。

Y： 生き別れのほうは結構いるんですけどね。

X： 離婚したというのはいますよ。死別というのはい少ないですよ。少ないというか、いないですね。

司会者： 離婚というの父子家庭の方。

Y： 両方です。

X： 両方いますよ。父子家庭も母子家庭もいます。

司会者： でも死別の方向士というのはいあまり出会わない。

Y： ちょっといないですよ。

■突然の別れ

【母子グループ⑥】

司会者： 4人いらしたんですよ、お子さんが。

P ええ。突然ですから、亡くなったのが。何も残してませんでしょう、生活の糧になるものを。

司会者： 突然だったんですか。

P 突然です。だから当時は心不全といわれたんですけども、今でいう過労死ですよ。ちょうど、元の上司と新しい会社を立ち上げて、休むことなくずっとやっていて、1年ちょっとたって、やっと軌道に乗ったかなというところでしたから。

司会者： 突然倒れられたんですか。

P そうです。だから本当に、今でいえば、それ（過労死）が当てはまるかもしれないかなという状況ですよ。何か要るとなるとすぐに家にも電話がかかってくる。日曜日、夜も、関係なく出て行って、会社を開けて荷物を出したりという。普通のサラリーマンという時間帯ではなかつたですね。

司会者： お幾つぐらいですか、だんな様が。

P 42ですから。

司会者： 42、若いですよ。

P でも私はね、子どもがまだ1歳半だったでしょう。そっちに（関心が）いっちゃったから、「時間をかけて悲しむ」というのがなかったんですよ。

■「あきらめきれない」とあきらめる

【父子グループ③】

X: それはもう覚悟してましたからね。病気になってすぐ死なれたら、やっぱりちょっと、もうちょっと違ったのかもしれない。やっぱり2年間ぐらいあったので。

司会者: その期間があったことがすごく大きかったんですか。

X: 逆にね。準備ができるというわけじゃないですけど「しょうがないな」と思いますでしょう。いろんな生活の面ですとか気持ちの面ですとか。あと子どもたちもやらざるを得ないということに対しては。

司会者: Yさんもそんな感じですか。

Y: 私はそれこそ「あきらめきれないとあきらめた」という感じです。

司会者: でも、そう思うまでって時間がかかりますよね。

Y: 時間がかかるというか。かかったんでしょうかね。

司会者: そういうふうに整理されてきたんですか。「あきらめきれないとあきらめる」という。

Y: 整理というか、もう何というんですか、達観というか。

■子どもの心構え、母との別れを受け入れるプロセス

【父子グループ③】

Y: ちょっと今思い出してたんですけど、亡くなってからの親子面談で先生から言われたんですけど、「ご家庭で変わっているというご様子ありますか」と。「いや、ちょっとわかりません」、「そうですか。学校でもほとんど亡くなってからも変わらないですよ」と。結局2年間が長すぎたのかなという感じだったんですけど。

司会者: やっぱり少しずつしたから、ということなんですかね。

Y: 結局泣かなかったんですね、葬式の時、下の子は。ですから、ほとんどそういう心構え的なものができちゃったのかな、という感じで聞いてましたね。

X: うちもやっぱり死んだときは泣かなかったですね、全く。

司会者: 2年って結構長いですからね。

X: そうですね。やっぱり結構自覚するみたいですね。

司会者: 受け入れる長いプロセスがあったんですね。

■その後の暮らしに備えて

【父子グループ③】

司会者: 家事をご自分でなさるようになるというのも大変ですよ。

X: 結局死ぬというのがわかってますからね、覚悟してたんですね、2年間ぐらい。だから料理とかそういうのは女房がいる間に、教えてもらうわけじゃないですけども、ある程度。

司会者: ああ少しずつ。

X: ええ、そうです。

司会者: まだお元気だったころに。

X: ある程度動けますのでね、まだ最初のうちは。

2. 対処の方法

配偶者との死別が突然のことであった P さんとは異なり、配偶者の死を覚悟しながらの生活が約2年あった X さん、Y さんの場合は、子どもも含めて、新しい生活の準備を整える期間ともなった。しかし闘病生活が長いほど、治療や看病には困難がともなう。とり

わけ X さんの場合は、入退院を繰り返す妻の看病のために、X さんの仕事にも影響を与えている。

■ほとんど仕事ができなかった

【父子グループ③】

X: (妻が) 亡くなる前は、今とは全然違う会社にいたんですけども、自分で独立して会社を始めたときに病気になってしまって。非常にいろいろ大変だったんですけど。ちょうど独立したときと重なってしまったもので。

司会者: そうすると、独立して何かいろいろ業務が大変な時期と看病ということが。

X: そうです。ほぼ病気になって2年間ぐらい、病院を行ったり来たりされたもので。だから、ほとんど1年間は仕事ができなかったんじゃないかなと。

司会者: 最初の1年間ですね。

X: ええ、できなかったです。結局、最初の1年目が6回ぐらい入退院を繰り返したんですね、1年間で。その翌年は、ほぼ毎週、病院通いしたので、ほとんど仕事というのはできなかったですね、その2年間。

Y さんの場合は、入退院する妻の看病の負担はそれほど感じていない。それは、親族が経営する会社に勤めているため、周囲の理解があったことや、会社に子どもを連れて行くなどの対処ができたことが大きい。

■とくに仕事には差し障らなかった

【父子グループ③】

Y: 私の場合、ちょっとそういう「仕事で差しさわった」ということはないですね。うちは完全看護でしたし、入った病院も駅から歩いて10分ぐらいでしたから。ですから、子どもなんかも学校から真っすぐ病院に行ったり。私なんかも面会に行くのは7時まででしたけれども、6時ぐらいに病院に行くようにしています。

司会者: じゃあ、もうお仕事が終わったら病院へ行って。

Y: そうですね。周りが随分気を使ってくれたということもあると思うんですけども。

司会者: その当時のお仕事は今と同じお仕事ですか。違うお仕事だったんですか。

Y: 今と同じところです。

司会者: じゃ、割と早く帰ることも会社のほうでは。

Y: そうですね。私のおやじというのが社長をやってまして。まあ無理がきくというか。

司会者: お仕事だけでなく精神的にもかなり。

Y: そっちのほうが大変じゃないですかね。

(中略)

Y: そうですね。よく会社に連れてきて。土曜日なんか学校休みですね。そうすると、土曜日も出ますので会社へ連れてきて。

司会者: じゃあ結構、会社にお子さんと一緒に行って。

Y: (子どもは) 遊んでましたね、会社へ行って。

司会者: ああそうですか。でも小学生だったら、そうですね。そういう環境があったということは結構大きかったですね。

Y: そうかもしれませんね。

死を覚悟していたとはいえ、残された家族の喪失感にははかりしれない。その対処の方法としても、XさんとYさんでは、異なる対応がとられていた。家庭の中にある「母親」の空気を失くすか、残すかである。いずれにせよ、子どもたちとの新しい暮らしを編み出

すために、父親として苦慮してきたプロセスがうかがえる。

■死別後の対処、家中の何もかも取り替えて「空気を失くす」

【父子グループ③】

Y: カミさんが使ってた、それこそ蛍光灯とかそういうものに至るまですべて変えちゃいましたから。冷蔵庫から何から水道の蛇口に至るまで。

司会者: 新しく買ったり。

Y: 全部買いました。

司会者: それはご自身が気持ちの整理をつけるためにそうしたかったんですね。新しい生活に。

Y: 電子レンジ、テレビ、ビデオ、もうありとあらゆるもの全部変えちゃいました。

司会者: いつごろまでにそれを完了させたんですか。

Y: 半年ぐらいでやっちゃいましたね。

司会者: すごいエネルギーですね。やっぱりいろいろなものが思い出につながってるような感情ですか。

Y: そういうものないんですけどね。ただ何か。

司会者: 本当に気分一新というか。

Y: ええ。

司会者: そうすると逆に、お子さんたちも物で思い出すという感じではないわけですね。

Y: 逆にはないですよ。カミさんがそろえたものって、せいぜい浴槽のふろおけぐらい、浴槽本体ぐらいしか多分ないと思うんです。

司会者: そんなに変えちゃったんですか。

Y: 意図的に変えちゃいました。

■死別後の対処、亡き母親のやりかたを踏襲して「空気を残す」

【父子グループ③】

司会者: Xさんのところも親御さんの何か助けがありましたか。

X: あんまり頼まなかったですね、基本的に。うちの両親はまだ健在ですし、家内の両親も今でも健在なんですよ。でも、基本的には頼まなかったですね。なるべく家事とかそういう食事関係は全部私がやりました、子どもに対しては。

司会者: もともと、割とそういうことはめで。

X: いや、そういうわけじゃなくて。結局、子どもたちがやっぱり嫌がったみたいなんですよ。誰かが来てやってくれるということが嫌だったので、だったら家族でやったほうがいいという感じがあったんで。

(中略)

X: 死んですぐぐらいに「再婚しようかな」と思ったことがあるんですよ。でもすぐあきらめましたね、それは。あきらめたというのは子どもが小さすぎて、結局、彼女が来ると何か食事とかつくりますよね。後片付けをしますよね。そうすると微妙にお皿って違うんですよ、置く位置が、何となく。男の子がそれを何かやってもう一回出しますでしょう。微妙に違っているのがわかりますよ。それがすごい気になるらしいんですよ、男の子が。やっぱり死んだお母さんの片づけ方というのを踏襲してますよ、ずっと子どもたちが。それに対して第三者が入ってきて変えられることにすごい抵抗感を感じてたんですよ。それがもう露骨にわかるんです。嫌だっということに対して。

司会者: 家の中にお母さんをそういう形で残しておくとか。

X: 何ていうんでしょう、わかんないですけど、だから片づけ方が全部そういうふうになってる。今でも同じなんですよ。全く置き場所が変わらないですよ。そうすると「再婚しよう」と思っても家から全部引っ越しするとか、そこまでしないと多分だめじゃないかなと思ったこともあるんですよ。

《補足資料： Xさんより、電子メールにて》

若干昨日の件で付け足したいことがありましたのでメールいたしました。子ども達にとって、家という空間が母親の胎内のように感じられ、母親が使った物に母親の存在を見つけようとしていたようでしたので、置き場所を変えることもできなかつたし、まして什器を変えて母親の存在を取り除くことはできませんでした。子ども達と家内の母親の折り合いが悪くなったのは、祖母が世話をしてくれる都度に、“お母さんだったら美味しくできるのに”、あるいは“上手に出来るに”と何かにつけ“お母さんがいたら”という言葉、祖母は、孫に母親がいないことを不憫に思つてと申し訳ないという気持ちでついつい言ってしまったのでしょうが、その言葉を子ども達は聞くのが苦痛に感じられたようでした。母親を失った時の子どもの年齢によって、かなり父親が子どもに接する態度、環境の整備は違うものだと思います。

3. 仕事の変化、経済的負担

配偶者との死別は仕事との関わりや働き方にも影響を及ぼす。母子世帯の場合はもちろんのこと、父子世帯の男性もこれまでの働き方を変えなければならない場合がある。Yさんのケースは、親族が経営している会社で働いていることもあり、仕事への影響はとりたてて聞かれなかったが、Xさんの場合は、妻を亡くし父子世帯になったことで、これまでの働き方を大きく変えている。

■仕事のスタイルが変わった、「ハンディ」になっている

【父子グループ③】

司会者： お仕事もずっとこのお仕事が続いていきそうですね。

X： まだわかんないんですけどね。昔は外資系の会社にいたもんで、しょっちゅう海外へ行ってたんですけど、そういうことが全くできなくなっちゃったんです。長期出張が全くできなかったのも、そういう意味で生活環境、ここ10年ぐらい変わっちゃったんですね。そういう機会に戻れたら戻りたいなどは思ってますけどね。

司会者： 仕事上ですね。

X： ええ、そうですね。

司会者： 仕事のスタイルも結構、変わられましたね。

X： 変わりましたね。前は年間で150日か200日ぐらい出張してましたけどね。

司会者： ええ、そんなにですか。海外にですか。

X： そうです。海外とか、国内もそうですね。

司会者： じゃあ、おうちにいるほうが日数が少なかったぐらいのバリバリの働き方ですね。それが一切なくなっただけですか。

X： なくなっちゃいました、全く。

(中略)

司会者： 周囲の、例えば出張は自分ではできないとか、そういうことに対する理解というのは会社の中では。

X： いや、もうそれはないですね。結局行けないのが、それはもうハンディになってますよね。

司会者： 「こういう仕事を任せる」ということが、またちょっと違ってくるわけですね。

X： だから、ある程度無理して、(自分が)いない間に、だれか来てもらって面倒見てもらってということをしたことがあるんですけど、やっぱりちょっと負担がかかっちゃうんで、お互いに。だんだん難しくなるし、家内のお母さんにも来てもらったことがあるんですけど、やっぱり子どもとの折り合いが悪くて。というのは、子どもはやっぱりおばあちゃんに、そういうのをやられるのを嫌がるんですよ。それだったら自分でやりたいと。でも実際にそれはできませんでしょう。そういうので。

司会者： じゃあ次第に。最初は同じような働き方をしてみようかと思っていたんだけど、できないということで割り切るようになってきたんですね。今もそれはずっとスタイルとしてはまだ。

X： まだ続いていますね。

司会者： でも経済的には、お子さんが進学したり、そういうことにほとんど心配がないというか、そういう無理がないぐらいの状態はずっと続いておられますか。

X： そんなことはないですね、やっぱり。厳しくなったんじゃないかな。収入の面でもかなり減りましたもんね。

司会者： 収入の変化は大きかったですか。

X： 大きいですね。

父子世帯の場合は、ひとり親になる前からの仕事を継続する機会が多いことから、母子世帯のような経済問題はそれほど生じないと一般的には言われるが、Xさんのように働き方が変わることによって収入の変化をとまなうことがある。Yさんの場合も、妻が病気になってから「配食サービス」を利用しており、入院費や治療費も含めて、経済的な家計の支出面の負担は大きいものと思われる。

■配食サービスを利用

【父子グループ③】

Y： カミさんの生きてる時分には「〇〇」（注：宅配食会社）というんですかね。

司会者： よく知っています。食事のファミリーセットで有名な。

Y： あれをずっと取っていました。

司会者： それは奥様にご病気になられてから。

Y： そうです。

司会者： 私も実は介護であれを使うようになって本当に助かりました。今は冷凍パックの。

Y： いや、あれは高いんで。素材で取ってます。週に、それでも3日か4日ぐらいしか取ってませんけれども、大体それで夜は回ってますね。

司会者： じゃ、今もずっとそれを。

Y： そうですね。そのとおりに来るものをつくっちゃって、という感じですね。

司会者： でもあれは意外と経済的にも結構。

Y： 結構、高いんじゃないですか。同じ品物をそろえて、このメニューというか、つくり方であれば、全然そっちのほうが安いと思います。

司会者： そうなただけど、今日は何にしようかとか選びに行ったり、それを考えると、もうちゃんと分量できて言われたようにやればいいというのは、ほんと助かるんですね。それは何かで調べて〇〇というのを知ったのですか。

Y： どうなんですかね。カミさんが入院しているときに、「こういうものがあるんで」という形で。いきさつはわかりませんが。入退院を14~15回しましたかね、そのときぐらいから自然にでき上がっちゃったような感じですね。

ひとりで仕事を子育てを両立しなければならない父子世帯は、母子世帯と同様に、経済的な困難を抱えるにもかかわらず、母子世帯であれば認められる「児童扶養手当」や「遺族年金」といった社会保障の対象とされていないことは、現行のひとり親家族政策の問題のひとつである。母子世帯のなかでも、遺族年金が認められる死別世帯は、離別世帯と比べて経済的には比較的手厚い所得保障が用意されているが、夫と死別したPさんの場合は、制度の狭間で遺族年金が認められず、離別世帯と同様、「児童扶養手当」を受けていた。

■遺族年金の受給要件を満たせず

【母子グループ⑥】

P: 主人が亡くなったのは、(1985年の年金改革で)厚生年金と国民年金に変わったときで、ずっと厚生年金だったんですけど、会社を起こして国民年金になって。それで払ってたんですが、やっぱり生活も大変なので、ちょっと払い忘れがあったんですね。払わないと何とかいう、そういうのも全く無知でしたから。2カ月か3カ月、ちょっと遅れてたんですよ。それで慌てて払い込んだんですね。払い込んだんですけども、結局、市役所に行ったときには丸々3年たってないとだめなんですってね、国民年金に変えても。だから通算しても25年たってないとだめなんです、ということで、3カ月分足りない分を払ったとしても、25年に3カ月足りなかったんだ。

司会者: たったそれだけ。

P: それでだめだったんですよ。年金をいただけなかったんです。

司会者: 延べ25年に、たった3カ月。

P: 3カ月足りなかったんです。結局、市役所がいろいろ調べてくれたら、通算して25年に3カ月足りなかったからだめと言われたんですよ。結局、遺族年金をもらえなかったんです。それで、東京都のその、児童育成手当と、児童扶養手当かな。何か二つ。

司会者: ありますね。

P: 二ついただいていたんですよ。最初は4人全部、子どもに入りますから、そこそこ生活の足しにはなりましたけれどもね。

夫が亡くなるまで専業主婦だったPさんは、当時、中学生から乳幼児までの子ども4人を抱えて、仕事をはじめた。複数のパート仕事をかけもちするなど大変な時期もあったが、その働き振りが認められ、別会社からヘッドハンティングされるまでになり、現在は安定した仕事に就き正社員として働いている。しかしそれでも家計の状況は厳しいと話す。その原因のひとつは、家賃負担の大きさである。公営住宅には申し込んでも当たらず、一度、紹介があったところは非常に不便な場所であり、「子どもを転校させること」「通勤に時間がかかること」「通勤に時間がかかれば子どもと接する時間がなくなること」等を考慮して、断念している。

■給料の半分は家賃

【母子グループ⑥】

P: その会社に行ってそれだけのお給料をいただいても、足りない分は足りないですよ、ぜいたくしなくても。

司会者: 支払わなきゃいけないものが幾つかあったり。

P: まず家賃が。親子5人ですよ。暮らすにはそれなりの部屋がないとだめなんですよ。

司会者: そうですよ。体も大きくなると。

P: そうすると女の子2人は1部屋でいいけど、男の子はやっぱり1部屋。一番チビと私はこうなると、最低でも三つ部屋が欲しいわけですよ。そうなると、チビと私の部屋で食事をしても何をしてもいいんですけど。でもやっぱり、大きい子たちの部屋はそれぞれ独立してあげなきゃ。やっぱりそれなりの家賃は取られるわけですよ。

司会者: 東京ですとね。

P: まず、家賃に半分は持っていかれちゃうんですよ、収入の。だからやっぱり、手当、扶養手当とか、そういうのはすごい助かりましたよ。

■公営住宅の立地の不便さ、「生活がすすんでいく」ような雰囲気暗さ

【母子グループ⑥】

P: だから本当に家賃というのが大きいですよ。

司会者： どの方のお話を伺っても、「家賃でなくなっちゃう」っていいですね。収入が。

P： ないんですよ。収入が家賃でなくなるんですよ。

司会者： 何のために働いているんだろうという方がね。

P： 家賃を払うためですよ。家賃を払って生活ぎりぎりですよ。

司会者： 公営住宅などは考えられましたか。

P： 考えましたけれど、結局、当たらないんですね。

司会者： 当たらなかったですか。

P： 当たらないし。都営も何回も申し込んだんですよ。本当に当たらない。1回、都の人から連絡がありまして。全然みんなが住まないところ、東京都下の何とかね。

司会者： ちょっと遠くへですか。

P： 今だったら電車の便がいいのかもしれないですけども、空き家がたくさんあるんですけど。

司会者： そういう都営住宅があったんですね。

P： そこだったらすぐ入れますよと言われたんですよ。家賃もそこそこ安いですし。

司会者： その連絡がきたんですか。

P： 連絡をいただいたんですよ、「よかったら」ということで。でも、あまりにも遠いんですよ。子どもたちをまた転校させなくちゃいけないし。私自身の仕事は、通うのは全然構わないですよ。ですけどそういった部分、いろんな部分を考えたら、往復の時間1時間半をかけて通勤する。そうすると子どもたちにかかる時間がなくなる。子どもたちが転校するということで、転校するそのマイナス点というのはあるわけですよ。ですから、そういったことで考えてお断りはしたんですけども。

司会者： ほんとに住宅政策と家賃の高さというのは、大きな問題だと思いますね。

P： 大きいですよ。私の知り合いが〇〇にある都営に入っているんです。そこに遊びに行ったことがあるんですけど、「ここだったら住みたくない」と思いましたね。もうすごい牢獄みたいところなんですよ。古いんですけども大きいんですよ、確かに。エレベーターを上がっていくと、中が。アメリカの監獄って中が空いているじゃないですか。周りにずっとこういう何かがあって、そういう感じなんですよ。暗いんですよ。エレベーターでこういうふうな。周りが空いているのね、中庭みたい。庭じゃないんですけど屋根があるから。そこはほんとに暗いところなんですよ。通って行って、もちろん南側ベランダは明るいんですけど、鬱陶氣的にすごい暗いんですよ。こういう都営だったら私は住みたくないと思いましたね。生活がずさんでいくかもしれないという、そういう気持ちに陥っちゃいますね、入った瞬間。

司会者： 心理的にですね。

P： そういう思いがありました。だからその人もそこで苦勞はしてますけれども、都営ですからやっぱり出るに出来ない状況でしょう、収入的な面で。でもそんなに安くないんですよ。そこは15万ですからね、高いですよ。大きいですよ。

安定した職業で給与収入を得ていても、Pさんが家計が苦しいと訴える原因のもうひとつは、母子福祉資金貸付金の返済である。過去に借りた子どもの修学資金と住宅の修繕資金の返済が、現在の家計を圧迫している。

■貸付金の返済の負担

【母子グループ⑥】

司会者： 今の仕事はすごく安定的に、ずっと定年までできるというような形ですか。

P： そうですね。

司会者： そうですか。それはすばらしいですね。

P： 今はほんとにもう、何が困ってると思ったら、やっぱり金銭面だけですね。

司会者： やはり正規職員でも厳しいですか、家計も。

P： とうか、やはり今まで何かあると、どうしても「まとまったお金」というのがないわけですよ。